
性悪と子羊と

斎藤 柚木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性悪と子羊と

【Nコード】

N7981Y

【作者名】

斎藤 柚木

【あらすじ】

世界には神がいた。——いや、いると表現した方が良いのだろう。その大いなる力は奇蹟と呼ばれ、人々を魅了した。その大いなる力は宗教を巻き起こし、また、魔術と呼ばれる奇蹟の模倣品が誕生する。これは、闇に潜む魔術師と、その模倣品を神への侮辱だと弾圧する教会との戦いを描いた、物語である。——と、言う事は無く、何の目的も持たない二人の少女があっちへふらふらこっちへふらふらと旅を続けるだけの、お話。

プロローグ

満月は、煌々と冷たい光で街を照らした。その明るさを潜めた光は、普段は活気に溢れているのであろう街を、まるで死人であるかのように錯覚させ、照らし出す。

その、静かな人気のない裏路地を、一人の少女が駆ける。
月光を反射し、冷たく光る金色の髪。

その髪の間隙から覗く、青空を映したかのような瞳。
闇に溶け込む様な、黒を基調としたゴシックドレス。

走るのには、不向きであろう、黒のブーツ。

しかし、それでも少女は走る。——捕まる訳にはいかないのだから。

「追え！ 逃がすな」

後ろから迫るのは無数の足音。

野太い怒声。

響く騒音。

蹴散らされるゴミ。

昼間でも人通りが少ないであろう薄汚れた路地裏は、その時は表通り並みの賑わいをみせていた。

石造りの壁に響く少女の足音は、後ろから追い掛ける更に大きな足音に掻き消される。

小さく漏れ出る悲鳴など、誰も聞く事が出来ないだろう。

少女は巧みに路地を右へ左へと駆け抜ける。

誰にも追いつかれないように。

決して、捕まらない様に。——しかし、突然、少女は立ち止まった。

「……………」

茫然と、息を吐きながら、少女は眼前の壁を前に立ち尽くした。

周りを見渡す少女。

だが、見渡す限り周りは壁、壁、壁。

三方を壁に囲まれ、唯一残っている道は、少女が来た道。なにも出来ずに、少女はその場にへたり込む。

「居たぞ！」

響く怒声に、少女は小さく肩を震わせ、頭を抱え、恐怖におののく様に身体を丸める。

恐怖から、浅く、速い息を少女は吐く。

目からは零れんばかりの涙を溜めに溜め、口からは小さく悲鳴が漏れ出た。

「魔女め」

忌々しく、少女を追っていた男の一人が呟いた。

男たちが持つ灯りに照らされ、その光から逃れる様に少女は身を擦る。

もしかしたら、それで逃げる事が出来るかもしれないと思ったから。

もしかしたら、それを見て、男たちが少女を憐れむかもしれないと思ったから。

少女は、幾つものもしかしたらを、考える。

考える、考える、考える。

それは、考えるというよりは、願望と表現した方が適切だろう。もしかしたら、という甘い考え。

「——ひっ」

最後まで考える事を放棄しなかった少女の思考は急速に現実に取り戻された。

「手間、掛けさせやがって」

荒々しく手を引かれた少女は、身体が付いていかず、石畳の地面を引き摺られる。

少女はなんとか抵抗しようとするが、成人男性の力に、漸く十代を迎えた様な少女の力が敵う訳もなかった。

しかし、少女は諦めない。

手を振りまわし、地面を踏ん張り、有らん限りの力で男に抵抗しようとした――が。

「暴れるな」

もう一人の男が少女を押さえつけ、押し倒す。

少女は地面に、うつ伏せに押し倒された。

肩と、頭を押さえ付けられ、少女は苦しそうに顔を歪めた。

冷たく、ごつごつとした石畳の感触。

黴臭い路地の臭い。

頭上を飛び交う、男達の罵声。

少女は身体を震わせる。

溜まっていた涙は頬を伝い、石畳へと流れ落ちる。

「だずったずけて」

周りで見ている男たちに哀願する少女。――しかし、誰もその言

葉に耳を傾けない。

魔女と呼ばれた少女は周りを見る。

集まる視線は怨嗟、侮蔑、嘲笑の視線。

「ごめんなさい」

ぼつりと、少女は呟いた。

恐怖からひきつけを起こした少女は、ごめんなさいと何度も呟く。

何度も、何度も、何度も。

周りに懇願を聞く者などいないのに。

ずっと、一人で呟き続ける。

「おら、立て」

グイと、腕が引つ張られ、力なく立たされた少女は心なしか笑っ

ている様に感じられた。それは、恐怖から来るものか、それとも――

力なく少女は揺れる。

膝は笑い、体中の筋肉が収縮を繰り返すのが傍から丸分かりだ。

そして、少女は口を開いた。

覗く口腔は、灯りに照らされ、赤く妖しい。

「おじ様」

「ああ？」

「愉しんだ？」

自分の手を掴む男に上品に微笑み返した少女は、するりと男から離れた。

周りは呆氣にとられる。

男も、呆氣にとられる。

少女だけが笑う、嗤う。

「どうし……て」

男は少女を見て茫然と呟く。

確かに手を掴んでいた筈なのに、どうして逃げられたのだ、と。

男は少女を見て愕然とする。

少女が手に持つ、液体を滴らせる物を見て。

今度は、恐怖が男を支配する。

「おじ様、これが何かおわかりになる？」

男の視線に気付いた少女は、その手に持つ物を可愛らしく掲げる。

それは、腕。

筋肉がしつかりと付いた、成人男性の腕。

「腕……俺の——うでええええつつ！」

全てを理解した男の悲鳴が路地に響く。

掠れた様な叫びは、野太くも、先程の様な気概を感じられない。

周りの男たちは予想外の事態に、動く事も出来ずに、ただただ茫然と立ち尽くしていた。

「せーかい」

無邪気に笑った少女は、手に持つ腕を、雑に投げ捨てる。

「あ——あああああああ」

腕を受け取った男は悲鳴とも絶叫とも取れる声を出し、半狂乱気味に腕を押し付けた。

そんな事しても、取れた腕がまた戻ることなどないのに。
もしかしたら、と一縷の望みを掛けて。

しかし、男はそれすら考えていないのかもしれない。

どくどくと夥しく流れる血を眺めながら、男は何度も腕を戻そうとする。

響く悲鳴。

黴と鉄の臭い。

茫然とする男達。

半狂乱の男。

血に塗れ、嗤う少女。

「ねえ、おじ様方？」

手から滴る血を舐め取りながら、少女は艶やかに笑う。

口から覗く舌は、血より鮮やかで、赤い。

「もつと、遊びましょう？」

煌々と冷たく照らす満月よりも、冷たく青い瞳が、男たちを見下した。

「退屈」

ホテルに戻って、一人呟く。

オーバーエスト

西の大陸の西岸部に位置する大陸最大の強国、キャメロン。その中でも一際交易が盛んなこの街は、街の至る所に雑多な文化が入り乱れている。

それは部屋から眺められる庭園にも如実に表れている。

大陸の西南部で賑わいを見せている繊細な技巧を凝らした、触れれば壊れてしまいそうな外灯。その外灯の土台に彫られているのは物々しく、華美な彫刻。——確か、これは大陸の中央部で興った文化だったか。

その外灯一つとっても節操もなく、統一感もない庭園に、私は苦笑を浮かべた。

最初はその雑多な文化を面白くも感じたが、こう何度を目にし、見慣れてくると、その統一感の無さに目が回ってしまいそうになる。窓辺から離れ、ソファに身を投げる。柔らかく、身が沈むのを肌で感じながら、深々と座ると、自分の身体に付いた微かな血の臭いが鼻腔を擽った。

先程の出来事を思い出し、もう一度、退屈と呟く。

「ティア、お風呂はまだかしら？」

「まだだよ。もう少し待って」

バスルームの方へ声を掛ける。リビング（ここ）からバスルームは見えないが、そこから返事は返ってきた。

「早くしなさい。使えない下僕ね」

悪態を吐くと、はいはい、と生返事が聞こえた。

どうやら調教がまだ足りないらしい。

それにしても、暇だ。

「教会もお粗末ね」

暇だったので、先程まで遊んでいた男たちを思い出し、呟く。

教会——正しくは、オルメクス教。

聖女アリア・オルメクスを祖とする、一神教。

この西の大陸で最大の勢力を持った古くからある宗教だ。

神の神託を授かった聖女は、様々な奇蹟を起こし、神の教えを説いた。その教えは素晴らしい物なので、皆さん、教えを守って生きて行きましょう。簡単に纏めると、こうなる。

探せばその辺に転がっていそうな宗教だが、この宗教がここまで勢力を広めたのには訳がある。

聖女は、本当に奇蹟を起こした。という事。

その奇蹟は強力なもので、各地にその奇蹟にまつわる伝承や、その奇蹟が本当であると証明する遺物が沢山残っている。

そして、聖女の奇蹟は“教会と魔術師（二つ）”の派閥を作り、派閥の対立は今日まで続いている。

「魔女狩りだなんて、素人には無理でしょうに」

まず、“魔術師の弾圧（魔女狩り）”の発端は、両者の信仰の違いにあった。

教会は、聖女の奇蹟を、神を、解き明かしてはならない存在だとした。

聖女の奇蹟は神秘である、と。

しかし、それに異を唱える者たちがいた。

奇蹟を究明すれば、神に並びたてる、と。

——それが、魔術師。

彼らは聖女の奇蹟を“ゴエーティア偉大なる一步”と呼び、魔法とも呼んだ。

そして奇蹟を研究するにつれて、生まれたのが魔法の模倣品である魔術だ。

その行為に、教会は激怒した。

その行為は神への冒瀆であるとし、弾圧が行われた。——魔女狩りの始まりである。

「報奨金まで出して」

教会の余裕のない態度に、思わず呟く。

それは傍から見れば、信仰（聖職者）と目標（研究者）の違いだとみるのだろう。だが、どうだ。一度街を歩けば様々な所に模倣品（魔術）は転がっている。

庭園を照らす外灯も、部屋を照らしている光も、全てが魔術だ。

この、教義に反していない魔術を認定しているのは教会だ。

結局の所、教会は利権と権威を失いたくないのだ。

利権にしがみつく信徒を、神とやらは見えてどう思うだろうか。

是非とも、感想を聞いてみたいものだ。

「ティア、お風呂はまだかしら？」

どうでもいい事を考えながら、私は声を掛ける。

あまりの暇さに教会などという、私にとって取るに足らない、矮小で脆弱な存在に気を向けて見たが、それは時間を潰すというものにもならなかった。

「ティア？」

返事が返って来ないので、不審に思い、立ちあがる。

面倒だ、とも思うが、これではいつまで経ってもお風呂に入れない。

一つ溜息を吐きながら、私はバスルームの扉を開けた。

「……………」

「……あはは」

扉を開けるとそこは桃源郷でした、まる。

「ティア、なにをやっているの？」

そこには湯船に身体を突っ込み、全身をずぶ濡れにしている少女がいた。少女というには発育が良すぎる気もするが、私の記憶が確かであれば、まだ少女というカゴリの範囲に入ったと思う。

雪の様に白く長い髪は、頬に張り付き、頭に付いた獣耳は力なく垂れている。

忌々しい事に発育の良い胸は、水分を含んでピッチリと張り付いた服で強調されて、妖艶だ。

黒のホットパンツから伸びた肉付きの良いすらりと伸びた足も扇情的。

ああ、ぴんときた。

「わかつているわていああなたわたしとおふろにはいりたいのね」
きつとそうにちがいないいやそうとしかかんがえられない。

「目、目が怖いよアーシャ！ 違うつて、ちよつと足を滑らせただけなんだよ」

目の前で下僕が何か喚いているが、そんなことはどうでもいい。
いま重要なのは、私が求めているかどうかなのだ。

「ティア」

目を細め、少し強めに名前を呼ぶ。

すると目の前の少女は押し黙って上目遣いでこちらを見上げる。

青空を凝縮したかの様な左目と、金色に輝く瞳のオッドアイが素晴らしい。——興奮で、鼻血を垂らしてしまっても、それは私のせいではない。

「わかるわよね」

「はい」

にこりと笑い告げると、承諾が返ってきた。

肌を打つお湯の感触。

この瞬間は余りの心地よさに気が緩む。

血が濃くこびり付いた個所を綺麗に洗い流す。

綺麗になったのを確認すると、先にティアが入った湯船に、一緒に入る。

「ねえ、アーシャ」

「なあに？」

後ろから抱きしめられる様に、身体をティアに預ける。背中に当たるふよふよとした感触が心地いい。

「こういうのって、下僕が先に入っていいものなの？」

「気にしないわよ。私が先に入ると、この体勢になろうとすると面倒くさいじゃない」

全身を温める、身体を解す様なお湯。

そして、ティアの髪先から滴り落ちる雫。

お湯との温度差に、少しこそばゆく、笑いが零れた。

後ろでティアが不審がつている様だが、気にせずに入浴を楽しむ。

「そういうものなんだ」

「そういうもの」

彼女の髪先を指で弄りながら、生返事で答える。

水気を含み、しっとりとした髪は、指に巻き付けても抵抗一つなく、するりと手の平から滑り落ちる。

「相変わらず、綺麗な髪ね」

私の言葉に、少しだけティアは身体を固くした。

十年以上経つのに、褒められるという感覚に慣れていないらしい。だが、そんなもの私には関係がない。

綺麗と感じた物は綺麗と評するのが、私の信条だ。

「こんなにも綺麗なのに、禁忌の色だなんて教会は馬鹿ね」

ここからでは何う事は出来ないが、きっと後ろで彼女は苦笑しているのだらう。その位はわかるほどの時間を、私たちは一緒に経てきたのだ。

体重を掛けながら仰け反る。

胸を圧迫されてか、彼女の口から艶めかしい声が漏れる。

見上げると、そこには困ったような、恥かしそうな、何とも言えぬ苦笑を浮かべたティアの表情があった。

「ほんと……」

手を伸ばし、彼女の顔をそつと撫でる。

頬に張り付いた髪の毛は艶めかしい。その純白の色は、魔術師としての素養が高い事を示し、今は力なく垂れている獣耳は、教会の教えを根底から揺るがすものであり、金色の虹彩を持つ瞳は、黄金

瞳とも妖精眼とも呼ばれ、教会に仇なす異教徒の信奉する神と同じだ。

でも、その総てが美しいというのに。

「馬鹿なものね」

小さく呟くと、また困ったような苦笑を、ティアは浮かべた。

身体の水気を拭き取り、寝やすい服に着替え、ベッドに倒れ込む。
「アーシャ、まだ髪の毛が濡れているよ」

ティアの言葉に応え、身体を起こすとティアに体を預ける。
近づく、彼女から石鹸と、甘い匂いが漂った。

その香りが、私はとても好きなのだ。

「綺麗に乾かしなさい。下僕ならできて当然よ」

私の言葉にクスリと彼女は笑みを浮かべた。

返事の代わりに彼女はタオルで私の髪の毛を丁寧に拭く。その動作一つ一つが私を安堵させる。

暫く呆けていると、頭に温かい風が当たった。

髪を乾かす為と、彼女が作った魔術だ。魔力の無駄遣いだとも思うが、それでも気持ちが良いので、文句は言わず、この心地良い行為に身を預けた。

「魔力の使い方、上手くなったわね」

風の、少しだけ熱く、それでいて心地良い温度に、私は正直に感想を伝える。

褒められた気恥しさで、魔力の波長が少しだけ乱れたのか、私の髪が少しだけ大袈裟に空を舞った。

褒めた途端にこれだ。一人前になるのはまだまだ先の事らしい。

「やっぱり、前言は撤回ね」

意地悪く呟くと、また後ろから苦笑を洩らした声が聞こえた。

彼女の苦笑は、彼女が見せる表情の中で最も出てくる回数が多い。

それだけ、彼女は苦笑する事に慣れている。それが、この生活と境遇で培われた物ならば、私はそれが心苦しい。

「……………」

「……………」

私はティアに身を任せ、ティアは私の髪をせっせと梳かす。

濡れた髪を乾かす為に当てられていた温風の名残で、髪に籠っている熱が心地良く、また、梳かされる過程で熱が外気と混じり合い、冷たさを感じるのもまた心地良さに拍車を掛ける。

無言の時間が流れていくが、それを私は苦痛には感じない。

余りの心地よさに思わず欠伸が漏れ出た。——が、もう少しだけこの心地良さに身を委ねていたかったので、気付かれない様に噛み締めた。

「終わったよ、アーシャ」

「ありがとう」

乾かし終わった髪を自分で撫でる。

ティアと比べると、ややしなやかさに欠けた髪質だが、それでも十二分に気持ち良い肌触りだと自負している。

自分の髪を触り、枝毛などが無いかの確認をしようと毛先の確認をしていると、頭を優しく撫でられる。

「ふ——あ」

普段からこういう扱いに慣れていない為、思わず口から甘い声が漏れ出た。

後ろで面白そうに笑う声が聞こえてくるが、まあ、楽しそうなのでよしとしよう。——私もこうやって撫でられるのが不服という訳でもない。

こうやって撫でられるのも幾年振りだろうか。

久々のこの感触を、今は楽しもう。

「……今日は、遅かったね」

後ろから聞こえる不安そうな声。

撫でられていた頭から負荷が消え、背中に新たな負荷がかかる。

後ろから抱きすくめられた私は、そつと優しく彼女の髪を撫でる。サラサラとした柔らかな手触りの髪の毛は、指の隙間からするりと零れ落ちる。

「また、魔女狩り？」

「……………」

悲しげな声に、私は何も答えられない。ただ、撫でる手に力を込めるだけだ。

「……私、やっぱり変なのかな」

私を抱きしめている腕に力がこもる。

その力は、強すぎて痛い位で、しかし、それ以上に彼女の悲しみと心細さが伝わってくる。

「私は——」

腕から逃れ、ティアを真正面から見据える。

足に触れるシーツの柔らかさが心地良い。衣擦れの音が、小さく鳴る。

そつと、彼女の頭を胸に抱く。

「私は変だとは思わない」

今度はこちらが痛い位に抱きしめる。

彼女が心細いなら、私はそれに応えるまでだ。

「教会の説法なんてくだらない。そんなものに惑わされるなんて馬鹿のする事よ」

抱きしめる力とは対照的に、そつと優しく彼女の頭を撫でる。

「私は貴女の髪も、耳も、瞳も、全てが愛おしい。おかしい所なんて、一つもないわ」

抱きしめる力を緩め、そつと額に口づけを一回。

「——っ」

唇を離すと、面白い様にティアは顔を赤くしている。

その様子があまりにも可愛らしくて、思わず私は笑ってしまった。「さ、もう寝るわよ」

ティアをベッドに押し倒しながら言う。

慌てるティアを尻目に毛布を深々と被る。抗議の声等聞く耳はない。

「貴女のご主人は？」

「……意地悪」

拗ねた声を出すティアにもう一度笑いながら、私はティアを抱きしめた。

『神は人間を作り出した』

「……」

教会の説法を思い出し、胸の内を暗い感情が支配する。

ほんの数百年前まではなかった説法だ。他宗教を侵略する際に都合が良かった為にそうしたのだろう。そんなエゴに、この子が巻き込まれる事等、絶対に許さない。

「……アーシャ？」

不安げに見上げる彼女。

どうやら抱きしめる力が強すぎたらしい。
安心させるように、背中を何度か撫でる。

「なんでもないわ。ティア」

伝え、さっさと目を閉じた。

無風というには、その森は僅かに騒がしく音を奏でる。風は穏やかに草木を撫でた。

月の明かりも、木々に阻まれて、大地まで届く事はない。その暗く、僅かな音しかしない森を動く獣は一つもない。

獣も鳥も、全ての生き物達は自身の住処に引き籠り、休息をとっていた。

そんな深い森の中に、ソレはいた。

ギチギチギチと不快な悲鳴を上げる関節を幾つも持ち、幾本もの脚を動かして、その蟲は森を彷徨っている。

身体の至る所に赤く光る眼を持ち、その眼は忙しくあたりを見渡していた。

ただの蟲ならばそれは普通の事だろう。だが、その蟲は地面からの高さが優に三メートルは超えていた。――まさに、異形というより他ないだろう。

「気持ちわる」

静かな森の中で吐き捨てられた言葉。

シスター服を着た女は遠くからその蟲を見てげんなりと言葉を吐いた。

数百メートルは離れているであろう場所から、シスターは遠くを見ては厭そうな顔を繰り返した。

教会の修道女が来ている典型的な修道服は、その豊かな体系に押し上げられる様に隆起し、微かな月の光を浴び、暗闇に溶け込む様な藍色の髪と黒い瞳は、どこか背徳的な色香を漂わせている。

「静かにしろ。アレでも“神性を持つ生き物（化け物）”だ」

シスターの隣では神経質そうな神父がシスターに苦言を漏らした。皺一つない神父服。

髪はきつちりと撫でつけられており、乱れ一つない。

眉間には深い皺が刻まれ、険しい表情が更に厳しくなる。――それは一重に、彼の切れ長の目も原因の一つであろう。

その手には、布を巻き付けられた棒を握っている。

「神性、ねえ」

遠方に見える異形を睨め付けながら、シスターは呟く。

――神性。

それは神の奇蹟に近い類を称するものだ。

魔術もこれに該当し、神性が高ければ高いほど、神に仇なし、神を侮蔑するものであるという事を示している。

『神は奇蹟を生み出す唯一無二の存在である。』

教会は、そう説いてきた。

しかし、現実には神の様に力を使うモノが多数存在するのだ。――それは、教会にとつては非常に目障りだった。

だからこそ、教会は踏み切ったのだ。

「行くぞ、ノイン」

化け物を、殲滅する事を。

神父はシスターに告げると、棒を覆う布を剥ぎ取った。

それは一振りの槍だった。

材質は金属の様でもあり、鉾石の様でもあり、また、木材の様でもあった。

槍の中心部には赤い宝石。

まるでソレを心臓に見立てるかのようにして、柄全体に隆起した血管の様な彫刻が張り巡らされていた。

「専門外なんだけどな」

やる気が無さそうにノインと呼ばれたシスターは一振りの剣を引き抜いた。

ソレは切っ先が潰された奇妙な剣だった。刃毀れ一つない綺麗な刀身にしては、切っ先だけぞんざいにされた剣は奇妙な雰囲気を感じている。

「……………」

神父は一度だけ、吐き捨てる様な視線でシスターの持つ剣をみる。シスターは、その神父の様子には気付かずに、今一度化け物を睨め付けた。

「さて、行きましょうか」

まるで買物にでも行くような気軽さで、シスターは呟いた。足取りには恐怖など全く感じさせずに、シスターはどんどん先に進んでいく。

神父はなにも言わずに、シスターを追う様に歩を進めた。

こちら表情とは対照的に、脅威を全く感じていない様だ。

二人の歩むスピードは一定ではなく、シスターはどんどん速度を増していく。その姿は、風を神父に連想させた。

静まり返った森に突如漂った濃厚な気配に、異形はあらゆる場所に目を向けた。

ギチギチギチと耳障りな音を、関節から異形は掻き鳴らす。

警戒態勢を取った異形は、殺意を放つモノに向け、警鐘を放った。先ほどよりも大きい不快な音。

ミシミシとなる音を、異形は相手に放つ。――まだ見ぬ殺気の持ち主へと。

「――不快だわ」

異形は、自身を穏やかな風が撫でたかと思うと同時に、女性の声を聞いた気がした。

瞬間、異形はバランスを崩し、地に伏した。

「……あら」

剣に付いた血糊を振り払い、シスターは意外そうな声を上げた。

その視線の先には先程斬り払った異形の姿。

異形は断ち切られた数本の脚を庇う様に立ち上がる。

赤く光る眼は、更に濃く、紅色に染まる。

「おかしいわね。頭を潰したと思ったのだけれど」

頭を捻りながら、シスターは軽い足取りで異形に近づいた。

そこに警戒一つもない。

まるで友人を見つけ、そこに話しかけに行くように。——その様

子は、紛れもなく異様だった。

「——ッ！」

異形は雄叫びをあげると、無数の脚を使いシスターへと襲いかかる。

前方の空間を埋め尽くす異形の脚。

逃げ場などなく、襲い来る無数の脚に対して、シスターは片手で

気軽に剣を振るった。

——一合。

“斬る”事に特化した剣は、異形の脚を一本薙ぎ払う。

——二合。

甲高い音を上げ、関節から異形の脚が数本宙を舞う。

——三合。

脚を数本薙ぎ払うと、まるでシスターを避けたかのように他の脚が地面へと突き刺さる。

瞬き一つが終わるよりも速く、その攻防は終わりを告げる。

「神性、と言ってもこんな森の主程度じゃ話にならないわね」

愛おしそうにシスターは自分の横に突き刺さった蟲の脚を撫でた。

その慈愛に満ちた目線は正しく聖職者にあるべき姿だ。

ただ、その姿は蟲の体液を浴び、聖職者と言うよりも狂人と表現した方がしっくりと来る。

「……あなたが人ならば殺せるのだけれど」

シスターは残念そうに呟くと、踵を返す。

「本当に残念。私はあなたの罪を肩代わりできない」

——一步。

異形の脚が数本唸りを上げる。

——二歩。

鋭い爪を持つ脚は、シスターに向けて振り被られた。
くるりとシスターは異形へと振り向いた。

その視線は慈愛と憐憫に染まっている。

「神の身許へは、辿り着けないでしょう」

そつと、シスターは指で神への祈りを切る。

刹那。

「——ッ！」

劈く様な悲鳴を上げて、異形は暴れ出す。

異形の背に槍を突き立てた神父。

その神父は表情一つ変えることなく、呟いた。

「——灰になれ」

呟き、神父は槍を引き抜いて、異形から降り立った。

「——ッ！」

異形はもう一度言語化できない悲鳴を上げ、今度は森の中をのた打ち回る。

木々は倒れ、雑草は薙ぎ払われ、森は目茶苦茶になっていく。

森の中を暴れ回りながら、異形が今度は小さく声を上げる。

その言語化できない声は、二人に対する怨嗟の声か。

脚を数本動かすと、今度は辺りに異臭が立ち込めた。

蟲の硬い外骨格の節々からどす黒い煙が上がっていく。

小さく、関節からギッ……ギッ……と音を鳴らすと、異形は完全

に沈黙する。——と、節々から今度は青い炎が燃え上がる。

その熱に乗り、先ほどよりも酷い異臭が辺りに漂った。

蒸発し、辺りに漂った生臭い血の臭い。

内臓の中に残っていたであろう糞を焦がす臭い。

外骨格を焦がす臭い。

外骨格内の気圧が変化した為であろうか、もう命をなくした異形

の身体は、燃やされながらギチギチと音を鳴らす。

まるで、断末魔を上げるかのように。

「行くぞ、ノイン」

「……はい。ゼス」

槍の先端に付いた血糊を振り払うと、異形には目もくれず神父は歩き去る。

シスターは一度、灰になっていく異形を見て、もう一度神への祈りを指で切った。

「んっ……」

瞼を閉じていても分かる目に刺さる様な日の光。

私は起き上がるのが億劫になり、毛布を頭から被り、頭を丸める。自分の体温で暖まったベッドは、私を今一度深い眠りへと誘う。

——が、私はまだ眠らない。

この眠るか眠らないかの瀬戸際が一番心地よいのだ。もう少し、このまどろみを楽しんでから眠るとしよう。

「アーシャ、起きて」

「んー……や」

ティアの声が頭上から降りかかる。少し、怒った声だ。

どうやら私よりも先に起きたらしい。——まあ、普段から私の方が先に起きる事など、滅多になかったが。

ぐいぐいと、強くもなくそれでいて弱くもない絶妙の力加減で私を揺する。

毛布の上から心地良い過負荷が掛った。こうして揺さぶられるのも、私は好きなのだ。

ずっと昔、それも記憶の彼方へと消え去ってしまった経験を、懐かしいと思ってしまうからなのだろうか。

その揺さ振りを楽しみながら、そろそろ意識を深い深い眠りに追いやろうとした所でその言葉は私に降りかかった。

「はー……お菓子」

「！」

ティアが残念そうに漏らした言葉。それは私の半覚醒の意識を覚醒へと導いた。

思わず毛布の中で身体を強張らせる。——ああ、考えてみればもうそんな時期になっているのか。

「ねえ、アーシャ」

暗かった視界が一気に明るくなり、私を守っていた暖かさが名残を残して消えていく。……ぐっばいさようなら。私の眠気。

光に目を慣らしながら目を開けると、そこには満面の笑みを浮かべ、私の毛布（友）を抱いたティアがいた。

窓辺から差し込む光は彼女の細くしなやかな髪の毛を輝かせ、笑みは猫を思わせる様な人懐こい笑み。その様子に私は思わず目を奪われる。

「デートしよう」

私は言葉を口に出せず、ただ一回、こくりと頷いた。

コツコツコツ、と硬質的な音が響く。

薄暗く、寒々しい石造りの階段をひと組の男女が降りていく。

灯りは蝋燭が数本備えつけられただけ。——魔術での明かりが発展したいま、その灯りを拒否するのは、一重にこの先に存在する機_モ関_ノが、魔術を徹底的に否定する存在であるからか。

階段を降りる男。その男は神経質だと雰囲気で伝えてくる皺一つない神父の服を身に付けていた。髪はしっかりと撫でつけられ、乱れ一つない。その眉間には皺が寄り、厳しい目つきを更に厳しくさせている。

男は歩みに一切の迷いなく、同じ歩調で歩き続ける。その姿は周りの雰囲気と同じように冷たく、暗い物だ。

対して女は、髪の色と修道服が暗い色である為、この雰囲気に溶け込んでいるようだが、温和な表情から発せられる慈愛の空気はこの暗い空気にはとても混ざりきらない。

藍色の髪と修道服は暗く重たい印象を与えているが、それ以上に温和に微笑み、少しだけ垂れた目尻は与えた印象とは全く別の物を与えている。

その一種異様なアンバランスさは得も言えぬ背徳的な色香を漂わ

せる。

ふと、シスターは階段の先に視線を移す。

石段の先は薄暗く、底が見えない。それは、この先に潜んだ罪の物影を連想させる。

思わず、シスターは祈りを指で切りそうになったが、それを抑える。その行為は神に仕える者達への無礼に当たると考えたからだ。

シスターは一度、少しだけ目を閉じると、何も言わずに階段を下りていく。

階段では音など忘れてしまったかのような世界で、ただコツリコツリと冷たく靴の音が響くだけ。——他の物音は、風音さえ聞こえない。

オルメキス教の総本山にこのような場所がある事を知る者は少ない。知るとすれば、それは表向きの上位層か、もしくは裏の身で暗躍をする者達だけだろう。

第四課神罰機関。神の奇蹟を冒瀆する者に神に代わり神罰を与える組織。

この階段はそこへと続く。

その階段は地獄を連想させた。

その階段は北の冬の様に寒かった。

その階段の先は、鉄と黴の臭いがした。

階段の先には地下だという事を忘れさせるような大きな扉が聳え立っていた。優に十メートルは超えるだろうか。

この先に神罰機関は存在する。

二人はその大きな扉をなんとなく開ける——と言う事はなく、その横に備え付けられた標準サイズの扉を使う。

「ゼス、私いつも思ってますけど」

「……なんだ」

「これって、不要じゃありません？」

これ、とシスターが指さす先には予想通りに扉が存在していた。半ば予想していた質問に、神父は溜息を吐くと一步一步と歩みを

続けた。

そこは長い廊下になっており、先程の薄暗い階段とは違い、明るく、暖かさを持っている。両側にはいくつもの扉が。

自分の質問を無視し、先を行く神父に不満を覚え少々頬を膨らませながら、シスターは後に続いた。

キヨロキヨロと辺りをシスターは見渡すが、廊下は先程の階段に比べてはましかとしても、いつもの様に殺風景だ。

ただ、光の有り難さと言うのを、シスターは再確認した。

——しかし、それでもやはり、空間には彩りが必要だ。

光の重要性をシスターは再確認したが、それでも不満をいつでもこの場所に覚える。

どこまでも続く廊下に、両側には埋め尽くすように扉が並ぶ。ただ、それだけが延々と続く廊下。白い壁と木の床は確かに先程までの階段と比べると何倍もましだろう。さらにここには先程まで無かった魔術仕掛けのランプが設置されている。

だが、それでも同じ景色ばかりが続くのは味気ない。

シスターは次に空間の彩りの重要性を再認識した。

コツリコツリと先ほどよりも幾分か柔らかい音が反響する。

二人は黙々と廊下を進む。

会話は全く交わされない。

——何部屋ほどあるのだろう。

暇を持て余したシスターの脳内に浮かぶ疑問。

延々と続く廊下。何度かこの場所に足を踏み入れた事があるシスターでも、ここにある部屋がなんなのか把握をしていない。——いや、もしかしたらこの全貌を知る者などひょっとしたらいないのかもしれない。

「……まずは観葉植物ですね」

殺風景だと考えていたら、いつの間にか口からそんな言葉が滑り出た。

目の前を歩いている神父の歩みがぴたりと止まった。

「……ノイン」

くるりと顔をシスターに向けた神父。

その時、いつそ気絶出来たらどれだけシスターは幸せだったろうか。

「ぜ、ゼス？」

「……………」

なにも言わずに、神父は笑みを浮かべている。……ただし、目は全く笑っておらず、眉間にはいつもより深い皺を刻ませて。

神父の様子におろおろとろたえたシスターはおずおずと口を開いた。

「……置きたい植物の、リクエストあるかしら？」

シスターの言葉に神父は笑みを消した。

……地下に、地上でもなかなかお目にかかれない雷が落ちた。

レンガ造りの建物が並ぶ中、街中は人でごった返す様に溢れていた。

強国キヤメロンをその地位に導いた大都市である交易都市には年に数回のお祭りが開かれる。

それは世界各地の特産品が集まる祭りだ。このお祭りで、手に入らないものはないと言われる程の賑わいを見せるのである。

都市の中央から伸びる五つのメインストリート。

そのメインストリートごとに露店が立ち並ぶのだ。

道を作る様に様々な場所で露店が開かれ、街の中心部に向かって人が列を作る様に歩いている。

ここだけでも十分な賑わいだ、これはこの通り道だけで起きている訳ではない。

メインストリートはこうしてどこもお祭り状態なのだ。

「すっごい人！賑わってるねー」

横では赤い外套を頭からすっぽり被った、一見してとても怪しい人物が祭りの感想を漏らした。

「ま、そりゃあそうでしょうよ。年に数回のお祭りなもの」

横の人物を見上げて、ニツコリとほほ笑む。

フードの奥から青と金色の瞳が私に笑い返してくる。

この見るからに怪しさ満点の赤フード、実はティアなのだ。

以前は、帽子と眼帯で獣耳と黄金瞳を隠していたのだが、魔女狩りが特に過激化してきたここ数年はあやうて髪まで隠さなければいけなくなってしまった。——ああ、外で元気にはしゃいで可愛い服を着たティアを見られなくなるなんて、本当に教会め忌々しい。

……まあ、衆目にティアの美しさを振りまかないで済むと考えれば、それはありな気がする。——が、ティアの美しさを自慢したいという気持ちも無きにしもあらず。

「アーシャ、お菓子ってどこだろうねー」

辺りを見渡しながら、私の手を引っ張ってティアは言う。

そのウキウキとした気分は、雰囲気と共に繋いだ手から伝わってくる。

楽しげな空気に当てられたのか私の頬が若干上気する。

確か、それぞれの特産品ごとに露店はわかれている筈だ。

お菓子はどこにあったらうか。

「お菓子は確か——」

ティアを追いぬく様にして少しだけ歩調を早めた。

繋いだ手を、強く握る。後ろから慌てた様な声が聞こえた。

長い廊下の終点にその場所はあった。

他の扉と同じような、木で造られた普通よりも簡素な扉。

扉を開け、神父とシスターは中に入った。

そこは地下だという事を忘れさせるような空間が広がっていた。

聖堂を思わせる造り。それは二人にとても馴染み深い教会と同じ
つくりだった。

壁に嵌められたステンドグラスの向こう側から光が差し込んでい
る。ここは地下であるため、魔術を使っているのだろう。一度だけ、
神父はその光を苦い表情で見つめる。

シスターは神父に気を留める事もなく、さつさと目的の場所へと
歩を進めた。

二人が目指す先は――懺悔室。

普通は一人が入るので精一杯な懺悔室は、そこはゆつたりと造ら
れていた。

三方を石壁で囲まれ、正面には相手の顔を見ない様にする為の木
で造られた壁があった。

ただ、そこには座るべき椅子はない。

そこには、広々とした空間が広がるばかりで、何も、ない。

「ヒュンメルとオルトレアですか」

二人が懺悔室に入ると、木の壁の向こう側から、声が聞こえてく
る。その声は高くもなく、低くもなく、中性的な男女の壁を越えた
先の存在であるかのような声だった。

神父は台を指で三度叩く。

シスターはじっと、目を閉じて黙祷を奉げる。

「質問になりますが、あなた達はテインクトウスをご存知で？」

もう一度、三度。

後ろでシスターが首を傾げたが、神父はそれを視界に入れないよ
うにした。

「なら説明は省きましょう。それが、盗まれました」

「――」

向こう側の言葉に、神父は一度齒軋りした。

その神父の様子に、シスターは勿論の事、壁の奥の男も動揺は見
せない。

まるで、思った通りの反応であるかのように。

「その回収をお願いしたい。目星は付いています。資料も後でお渡ししましょう」

——三度。

「有り難い。それともう一つ」

壁の向こうで声の主は一つ咳払いを。

数秒の後、声の主は口を開く。

「お二方は——“獣の檻”、をご存知ですか」

その言葉に、神父とシスターの纏う雰囲気、がらりと変わった。

「アーシャ、ここ凄いいよ！」

露店の飴細工を前に、ティアがはしゃいでいる。

確かに、飴で造られた動物達は見えていて心が躍る。

ウサギなどを象って作られている飴。この繊細な作りは大陸の西南部のものだろう。私も、ティアも何度か見た事がある。

「ほんと、綺麗だわ。おじ様、これは幾ら？」

露店の店主に向けて頬笑みを浮かべる。

出来るだけ、無垢な子供の様に。

年相応にはしゃぐ子供の様に。

店主は歳は三十を超えた辺りだろう。快活さが滲み出ている露店の主は、客商売に慣れた笑みを浮かべ、私を見た。

私の横の不審人物を見ても動揺しないとは、結構な場数を踏んでいるようだ。

「お！ 嬢ちゃん、これを気にいつてくれたのかい？」

声にも張りがあり、随分と気持ちの良い男だ。

もしかしたら毎回この露店を開いているのかもしれない。

「ええ。とっても綺麗。これはおじ様が？」

「ああ。飴細工売って旅をしているんだ。一本大銅貨四枚だ」

行商人かと思いきやそうではないらしい。確かに、ここに並んで

いるのは形だけは様々だが、飴ばかりの様だ。

旅をする人間は案外人が多い。そう考えれば、ティアに頓着しないのも納得がいく。――まあ、お祭り騒ぎなので仮装しているととれなくもない。

買おうかどうかをティアに相談する前に、銅貨が握られた手が差し出された。

「飴を二本下さい。私はこれを」

そっと、ティアは犬の形に作られた飴を指さす。

「アーシャ、貴女はどれが良い？」

落ち着いた声をティアは出しているが、きつと嬉しさで頭の獣耳はわさわさと動いている事だろう。その様子が、容易に想像できた。この子は、こういう露店にとっても弱いのだ。

「うーん……お姉さまとお揃いでもいいのだけれど……お姉さまが犬なら、私はこれ」

ティアの腕に抱きつきながら、犬の隣にあつた猫を指さした。私が猫で、ティアは犬。……なんとなく、あっている様な気がしなくもない。

しかし、こういう場所で姉妹のフリをするのは、本当に楽しい。こうやって密着していても姉に甘える妹にしか見えないのだ。

ああ、ああ、飴より甘いティアの香りが、私の鼻腔を擦っている。

「この二本だな。はい、どーぞ」

「ありがとう、おじ様」

自分が出せる最大限の微笑みを浮かべて、私は露店を後にした。

――こうやって、愛想を振り撒くのは、案外大事だ。いっどこで自分を助けてくれるかわからないのだから。

手渡された飴を舐めながら、私たちは他の露店へと足を運ぶ。

「ねえ、アーシャ」

「なーに？ お姉さま」

「……歩き辛いんだけど」

確かに、腕に抱きついて歩いている為、身体が相当密着してしま

っている。私はそうでもないが、抱きつかれているティアは歩き辛いだろう。

だから、私はもっと身体を密着させる。

嗚呼、柔らかい身体。

こんなに幸せな気持ちになったのはいつ以来かしら。

「ちよっ！ ティア」

「ふふ！ 逸れたら大変なもの。ね？ おねーさま」

折角の機会なので、もっともってティアを堪能しよう。

……お尻に手が伸びそうだけど、それは流石に自重ときましよう。

トントントン。

都度三回、指で机を叩く音がした。

「それでは、この二件をお願いします」

——今度は、一度。

「では、あなた方が進む道に、神の御加護がありますように」
その言葉に、神父とシスターは神への祈りを指で切った。

1 - 3 (後書き)

第一章終了です。

思ったほどアーシャの性悪っぽさが表現できなかったですね。
タイトル詐欺ですね。

これじゃただのエロ親父ですね。
魅力的にキャラを表現できてないですね。本当に申し訳ないです。

そして誤字脱字酷いですね。

今後気をつけます。また、誤字脱字が多いと思われますので、どうぞ厳しく指摘してください。

地下大聖堂は、清浄な空気に包まれていた。

しんと静まり返り、何か声をたてる者など、一人とていない。――

――その場にいる者は、神父とシスターの二人だけだったが。

二人は神へと祈りを奉げる。

オルメキス教に、奇蹟を齎した神へと。

一頻り祈りが終わると、神父は顔を上げた。いつもは額による皺も、その時だけは幾分か、なりを潜めている。――が、

「そう言えば、ゼス」

その心の安寧も――

「テインクトウス、とは何のことでしょうか？」

「……………」

――そう長くは続かない。

もう一度額に皺を寄せると神父は、大きく溜息を吐いた。

まるで、貴様は馬鹿なのか、と暗に告げるかのように。

「ひ、酷い！ 今絶対私の事、馬鹿にしたでしょう！」

そして、その心の内は見事にシスターへと伝わった。

こんな時ばかり察しの言いシスターに、もう一度溜息を吐きながら、神父は口を開いた。

その神父の対応に、若干心に突き刺さる物があったシスターだったが、表面上は平静を保ち神父の言葉を待った。

「………… テインクトウスは」

神父は重々しく口を開く。その険しい表情にシスターは息を飲む。

――その音は、静かな大聖堂だからか、幾ばくか大きく、シスターには聞こえた。それは一重に自分が緊張していたからか。

視線を緊張した面持ちのシスターに移す事なく、神父は目の前の聖女アリアの彫刻を見て、言葉を洩らす。

「聖女アリア」オルメキスが遺した、聖遺物の一つだ」

聖遺物。

それは聖女が遺した奇蹟を指し示す。

「聖遺物ですか」

ふむふむと頷きながら、シスターは神父を見る。その視線を鬱陶しく思ったのか、神父はシスターをひと睨みした。

その凶悪な面持ちから、シスターは短く『ひっ』と悲鳴を上げすごすこと視線を戻した。

——意味のある視線だったのになあ。

と心の中で一人ぼやきながら、次の言葉をシスターは待った。

「聖女の遺した聖遺物の中で、教会にとっては最も必要であり、最も必要なものだった」

矛盾した神父の言葉に、眉を顰めながらもシスターは口を挟まない。ここで下手を言ったら自分にまた雷が落ちてしまう。

シスターは、学習能力が高いのだ。

ふふん、と得意気に鼻を鳴らしながら、シスターは笑顔を浮かべる。それを神父に隠そうともせず。

勿論、神父はそのシスターの様子に気付いていたのだが、これ以上話を折られるのも癪なので、気付かないフリをして話を進める。

「アレは——聖女が遺した最後の奇蹟。神の奇蹟に最も近い、高純度の神性の塊だ」

そう言って、神父は聖女の像に祈りを切った。

日が暮れ始め、夜の帳がそろそろ落ち始めてきた。

空には一番星が輝き始め、形を欠いた月がぷかぷかと浮いている。「賑やかなものね」

日中遊び倒した私たちは部屋のソファに身体を沈めている。

街の中央にほど近いホテルは、お祭りの喧騒が中まで聞こえて来て、まるで自分達もそこに参加しているかのように錯覚させる。

日が暮れ、夜になってもこの祭りは終わらないのだ。

「そう言えば、このお祭りって数日続くんだよね」

「そうよ。お祭りが終わるまで、この喧騒は続きっぱなし」

—— ゆっくり休む事も出来ないわね。

不満げに呟くと、それを聞いたティアが微笑みを浮かべた。……

なにか可笑しい事でも言ったのだろうか。

「今年はどれだけ続くんだろうね」

「さあ？ 最近行われた秋だと、一週間は続いたって聞いたわよ」

「一週間かぁ楽しみだなー」

彼女はにへらとだらしなく笑みを浮かべ、耳は嬉しさのあまりかピクピクと動いている。ベッドに寝転んだ体勢のまま、足をぱたぱたと動かす。外のお祭り騒ぎに中てられたのか楽しさを隠しきれない様だ。

部屋のなかなので外套を脱ぎ、いつものタンクトップとホットパンツの姿になったティアは忙しなくベッドの上を動き回る。

まるで、躰けがなっていないペットを見ているみたいだ。—— 若

しくは、餌の前でステイを命じられた犬。

余りにも自分の想像と、ティアの様子が合っていた為、笑いを抑えきれず、声を上げてしまった。

「？ アーシャ、どうしたの」

「きつ……きに……しなくていい……ふふっ」

突然笑い声を上げる私を不審に思ったのか、ティアは首を傾げて私をマジマジと観察してくる。—— その様子も主人を心配して見上げる子犬の様でいじらしく思える。

疲れた身体をソファから無理やり引き剥がして、私はティアが寝転がっているベッドへと近づき、小首を傾げて、私を不審に見上げる彼女の頭を撫でる。

「わわっ！ どうしたのさ、いきなり」

「なーんでも」

しなやかな髪感触を楽しみながら、私は彼女の隣に腰を落とす

た。

「ぼふんっ、とベッドが揺れる。

柔らかなベッドが私を受け止め、隣に寝転ぶティアは突然ベッドが沈みこんだ事により少しだけ慌てた表情を浮かべていた。

「お祭りは楽しかったかしら」

「うん、楽しかったよ。賑やかな場所には今まであんまり行けなかったし、久々だったね」

伸びをしながらティアは答える。

先程までは子犬の様だった仕草は、どこか猫を連想させる仕草に変わっていく。

……そう言えば、彼女と最後にお祭りに行ったのは何年前だっただろうか。確か、あの時はまだこの子も私と大差ない位の身体だったはずだ。

そう考えると、子供の成長は早いものだ実感する。

か細く、枯れ木の様だった四肢は、いまは細いとは言ってもしっかりと肉が付いている。——うん、素晴らしい。

しかし、本当に早いものだ。あんなに小さかった子供がこんな風に成長するとは。

私が拾った時は胸に重たそうなモノをぶら下げてなかったし、身体全体が丸みを帯びてもいなかった。私よりも背が小さかったと言うのに、少し栄養を与えたら、コレだ。

——妬ましくなんて……ない。

昨日とは別の暗い感情が、胸の内を渦巻いていく。

「どうしたの？ 怖い顔しちゃ——痛い！ 痛い痛いっ」

少しばかり発育のよろしい彼女の頭を、力いっぱい撫でる。……これも、愛情表現だ。

嫉妬だなんてそんな見苦しい真似を私がする訳がない。ましてやティアに対してだなんて。

これは気難しい女心の嫉妬ではなくて、ただの彼女に対する愛情表現だ。うん、そうだ。

私は誰に対してもない言い訳を心の内で吐露する。

一体誰に向けた良い訳なのか。それは、私にもわからない。……

もしかしたら、それは神様に対しての言い訳だったのだろうか。

「ふふっ」

「あーもー、ぐちゃぐちゃじゃない——って、なに笑ってるのさ」

ぼさぼさにされた髪を必死に整えようとするティアが、その様子を見ていた私に食って掛かる。

「ごめんなさい。……ふふ」

ティアの髪を笑っている訳ではない。ただ、ただ可笑しかったのだ。

信じてもない神に言い訳する自分が、滑稽だった。

堪え切れずに洩らした笑い声に、ティアは頬を膨らませる。――

どうやら機嫌を損ねてしまった様だ。

「もう、アーシャは——って」

「はいはい。動かないの、下僕」

必死に髪を整えようとするティアの頭を撫でる。

さらりとした感触。その感触は絹を撫でるよりも滑らかで、水に触れるより柔らかかった。――この髪質なら、放っておけば、そのうち元に戻るんじゃないだろうか。とは言ってしまったらダメなのだろう。乙女心は複雑だ。

「ねえ、ティア」

「なーにー」

柔らかな彼女の髪を撫でながら、窓の外を見る。

喧騒はまだまだ響いており、まだまだお祭りが終わっていないことを証明していた。

ティアは心地良さそうに頭を撫でられている。時折、耳がピクピクと動いていた。

「夜のデート、行きましようか？」

彼女の髪を綺麗に整え終えてから告げる。

どうやら私も、お祭りの熱気の中であられたらしい。そう思うと、

また笑みを堪え切れなくて洩らしてしまう。

ティアは返事もせず立ちあがって、外套を羽織る。
それだけで、答えは十分だった。

そこは闇に覆われていた。

静寂の膜を纏った空間。

闇の向こう側を見通す事は出来ない。

『各自、定位置に付いたか』

静寂と暗闇が支配する空間に、男は立っていた。

通信用の魔術を行使し、仲間たちと連絡を取る。

『—— 3 . 8 8 . D に到達。待機します』

『—— 3 . 8 7 . D に到達。待機します』

『—— 4 . 9 8 . E に到達。待機します』

一拍の間を置き、仲間達から連絡が入ってくる。入ってくる情報を整理しながら男は前方を見据える。

明かりが一切ない暗闇の中に、ソレは存在した。

天に上った月からの明かりすら拒絶するかのような深い森の中、闇に紛れるようにひっそりと建っている小屋。

そのこじんまりとした小屋に灯りは灯っておらず、長らく小屋が放置されていた事を示していた。——ただ、一つだけ不審な点。その小屋には全く老朽化した点が見られなかった。

それは一重に、この小屋に潜むモノの存在を知らせていた。

『各員待機継続。警戒を怠るなよ』

自分の指示に、続けて了承の答えが返ってくる。それを聞き、男はふと、一つ息を吐く。

吐いた息は風に浚われ、男の体温を奪った。

視線を落とした男は、自身が手に持つ道具を見て、自嘲気味に笑みを浮かべた。

片手に収まるサイズのそれは、所々に文字が彫ってあった。

金属と鉱石を使い作られたそれは、英知の結晶である。——とはいっても魔術の、とつくのだが。

——魔術を狩る我々が、魔術に頼らなければならないとは。

もう一度、自重気味な笑みを浮かべると、木々の隙間から小屋を観察した。

その眼には、先程まで浮かんでいた自嘲の色はない。冷たく、感情の読めない無機質な色を浮かべている。

射抜くような冷たい眼光は、何物も見逃さぬという気迫に満ち充ち溢れている。

「……………」

——風が一阵、木々の合間を駆け抜ける。

揺れる木々の合間から、月の光が掌で水を救う様に零れ落ちた。

少しだけ、森の中を光が支配し、小屋の周囲を確認できるようになった。

その僅かな明るさの中、男は確かに見た。そして、ソレは——

『小屋の中に物影を見つけました』

——他の者達も同じだった。

その言葉に、男は神に祈りを切った。

一度息を吸うと、一拍を置き、口を開く。

『——獵犬部隊、突入』

「——ッ！」

騒がしい程の賑わいをみせる祭りの最中、その場に不釣り合いな冷たい気配が背中を撫でた。

周りを見る。

——露店の主と会話をする男。

違う。

——仲良く祭りを楽しむ一組の男女。

違う。

——いざこざが起きたのか、怒鳴り合う二人の男と、その騒ぎを

嗅ぎつけ、見物に回っている者達。

違う。

「……お姉さま」

「? どうしたの」

事態を上手く把握していないティアはパン屋が出している露店で買ったピザをまぐまぐと可愛らしい仕草をしながら食べている。――ああ！ 可愛らしすぎる。

今がこの様な状況じゃなかったら、もっともって見ていたいぐら이다。

「あつちの露店に、興味があるの」

相も変わらず、いつ見ても可愛いティアに、ウィンク一つをおまけにして伝える。

「ねえ、行きましよう。お姉さま」

彼女の手を引っ張り、歩き出す。

歩きながらも食べるのを止めない彼女に、少しだけ頬が緩んだ。

人ごみの中を歩きながら、視線の主を探す。

観察者は中々の手練のようだ。そう簡単には姿を見せてはくれないらしい。

周囲を出来るだけ自然体を振舞いながら、観察していく。――こういう時、普段から子供を“演じている”というのは良いアドバンテージになっているとつくづく思う。

なにかしら、私に不審な動きがあったとしても、相手側は演技の延長と処理してくれるからだ。――完璧な演技ができる者などいない。私が演じる子供には、不自然な所があるだろう。

そして、私を監視する者なら、普段の演技に不信感を持つ者が十人に十人は現れる。それが、プロならば尚更だ。

普段からの積み重ねが、こういう時に発揮されるのだ。……まあ、例えばどんな奴らが牙を剥いた所で、私にその牙が届く事はないのだけれども。

観察者を探しながら、ティアに食べ物を買って与える。

与える端からまぐまぐと食べていく彼女の健啖な食べっぷりはここまで来ると心地よく感じる。

ああ、邪魔をされなければもっともつとこの幸せな時間を堪能できると言っのに。

「……………」

「ん？ どうしたの、アーシャ」

「うっん。なんでもない。ねえ、おねーさま次はね——」

待ちなさい、私。

少し考えなさい、私。

この幸せをなんの心おきなく堪能したければ、邪魔者を処理すればいいのではなくて。

「あっちの露店にいこっ」

はしゃぐ子供を演じながら、先程より細かく周りを観察する。

ティアとの幸せな時間を守る為ならば、どれだけ労力を注ぎ込んだとしても、お釣りは返ってくるのだ。

そう考えれば俄然とやる気が湧いてくる。

「……凄い顔してるよ、アーシャ」

「何のことかしら、お姉さま」

ニツコリと満面の笑みを浮かべて返す。

私の表情を見て、もう一度アーシャがげんがりとした表情を浮かべたが、それは考えたら負けな気がした。

男たちは暗闇に包まれた森の中を物音一つなく移動する。

月光すら阻む森の中は、夜の暗闇と言うよりも闇その物であった。だが、そのハンデを物ともせず、目標である小屋へと近づいていく。その先に潜んでいるであろう男を捕まえる為に。——いや、捕まえるという表現は正しくないだろう。なぜなら、生死は問われていないのだから。

小屋の四方を取り囲んだ男たちは、出入口が一つしかない事を確認すると、集団の数人がまず、小屋の中へと押し入った。――不意に、風が冷たくなった。

竦み上がる様な冷たさの底に、ソレはいた。

肉塊と肉塊を重ね合わせ、紐で縛りつけ、そこから垂れた体液を煮詰め凝縮し、ソレを集め作ったかのような醜悪さ。

目標ではないナニカがそこにいる。

常識では測れないナニカ。

魔術に携わる者でも、このナニカを一体何であるのか判別する事は難しいだろう。

「――っひ」

息を飲む音が、静かな森の中で大きく響いた。

ギョロりと、音に反応したナニカは目を剥いた。――いや、ソレは果たして眼と表現しても良かったのか。虹彩などなく、瞳孔もなく、ただポツカリと白い穴が二つ開いているだけだ。

べとべととした粘液に包まれた中で、その空虚な目は一際異彩を放っていた。

「――お……おが、あ……ん」

口を開くたびににちゃにちゃと不快な音を立てながら、そのナニカは訴えた。

ずるりと、四肢が動く。

ぬらぬらと床に這いずった跡を残して。

びちゃびちゃと体液を撒き散らし、ぬらぬらとした四肢で床を掴み、口からはとても人語とは思えない不快な音を吐きだして、そして、一度だけ、ハッキリとナニカは言葉を吐いた。

「――お母さん」

突如、ナニカは男の一人に襲いかかる。

ぬらぬらとした四肢――手の様なものを突き出し、まるで男を抱きしめる様に。

子供が母親に甘えるかのように。

「——ちいつ、総員、退却」

リーダー格らしき男が声を荒げる。

その声に男たちはハッと我に返ると、一目散に駆けだしていく。
襲われた男を助けるような真似を誰もしない。

「神性……だと」

吐き捨て、男は小屋を出る。

もしこれが、化け物を相手にすることが前提の任務ならば、彼らも同僚を助ける事ができただろう。だが、今回は勝手が違った。

今回の任務に、化け物の討伐は入っていなかったのだ。

男は自分の装備を確かめる。——全てが対人用に特化した装備であり、他の者達も同じだった。

「なぜ？……誘き出されたか」

もし、ここで襲われればひとたまりもない。

男がそう思った時、風が一陣吹き、木々を揺らした。

木の葉の合間から光が零れ落ち、木々の合間から男たちを眺める
落ち窪んだ白い双眸を、幾つも浮かび上がらせた。

神経質そうに眉根を寄せる神父はコツコツと静かで硬質的な足音を立てながら廊下を歩く。

延々と続くかのような廊下を進んでいき、巨大な門を通り過ぎ、寒気がする階段を一定のリズムで歩いていく。

手に持つのは一枚の羊皮紙。

それには“懺悔室の壁の奥の更に向こう（最高司祭）”から直々に下された指令が書かれている。

——テインクトウス。

聖遺物であるそれに、神父は頭を悩ませる。

なぜこんな面倒な事を自分が、とも思うがそれを神父は口には出さない。態度には——いつもと同じ不機嫌で、厳しく冷たい雰囲気の為、傍目にどうと思われる事はない。

「……ちっ」

足音だけしか小さく響かない階段に、聊か大きく舌打ちが響く。

「——ひいっ!!」

そして神父の後ろで、少し大きく響いた舌打ちすら掻き消す様に、怯えたシスターが引き攣った悲鳴を洩らす。その大袈裟とも取れるシスターの態度に神父は気付かれない様に溜息を吐いた。——無論、氣遣った訳ではない。気付かれたらまた面倒な事になるからだ。

後ろを振り向く事もなく、神父は階段を上る。……少しだけ、歩調を速めて。

「ぜ、ゼス？」

少し様子がおかしい神父に、怒らせたかと心配するシスターは声を掛けた。

「なんだ」

シスターのそんな心配も神父には関係ない。

神父の口から吐き出されたのは、射殺さんばかりの冷たく鋭い対

応の声。もう一度、シスターは引き攣った悲鳴を上げる。

「あ、あの……怒っちゃいました？」

「——慣れている」

そっけない言葉。

シスターの白い頬に、汗が一筋伝う。

「い、いえね、怖いという訳じゃないですよ。ゼスの良い所だつていっぱいありますし、それに信仰も他とは比べ物にならないほど強い訳ですし……」

シスターはあたふたと言い訳がましい言葉を並べる。傍から見れば何とも面白可笑しい様子だ。

だが、神父は違った。彼は当事者なのだ。階段を上がる度に神父の額には深い皺が刻まれていく。それもこれも後ろのシスターが、神父が望んでもいないフオローを重ねて育成である。思わず神父は心の中で言葉を洩らす。

なぜ、自分はこの面倒くさい女と組まされているのだろうか。

いっその事、今度上司に掛け合ってしまおうかとすら神父は考えた。

「ノイン」

「な、なんですか？」

「そんなに」

神父は心を落ちつける為に、一度溜息。後ろではシスターがびくびくしているのが良くわかった。

「そんなに私は怖いかな？」

「……は？」

神父の言葉で呆気に取られたシスターは、口を大きく開け、ぼかんとした表情を浮かべた。その様子に、はしたないと神父は思うが、面倒くさいので口に出さない。

「——は、あつははっ！」

暫くして、遙か後ろからシスターの笑い声が聞こえた。なぜ遙か後方から聞こえたのか。それは、シスターが呆気に取られているう

ちに、神父は階段を上っていつている為である。

勿論、意図してこうなった訳ではない。

「こ、怖いかですって……ぶっぷうう！ か、鏡みてみなさいよ。
こ、こわつぶ、ふおっふおお、おほっ、おほほほ」

不気味に響く笑い声を、酷く不気味に神父は思ったが口には出さない。無論、面倒臭いからである。

先程までは不気味なほど、しんと静まり返っていたその場所は、
今では方向性が全く違う不気味さで覆われている。

——まるで魔女の儀式だ。

神聖なる教会内部に、まるで魔女が住み着いているかのように心底不快に神父は感じた。その不快感を隠しもせず、神父は——
「ちっ！」

——舌打ちと共に、懷から取り出した投擲ナイフを遙か下にいる
シスターに投げつけた。

「ぶっふお！ ぷっく、くくく——おっほあつぶ、うわああ」

笑い声とも悲鳴とも危機を察知しての声ともつかない声をシスターは上げた。そして、まるでシスターが階段から転げ落ちるかのような音が響く。——勿論、シスターは落ちている。

長い長い階段の中腹辺りから一番下まで。

「……………」

ドタバタと危ない音を聞いて、少しばかり神父の溜飲が下がる。

若干額に刻まれた皺もなりを潜めた様だ。——こうやって、神父は自分の精神的負担^{ストレス}を発散するのだ。無論、その負担の大部分（と、
いうより十割）はシスターが負わせているのだから、因果応報というやつだ。

だからと言って、ナイフを投げつけるのはどうかと思うが。

一度、溜息を吐くと速めた歩調を元に戻す。

静かな階段に、一定のリズムで歩く音が刻まれる。——先程までの騒がしさが嘘の様だ。

神父の心の内を表すかのような静けさ。

まさしく安寧のひと時である。

なんでもの

「ナイフ投げてくれるんですか！ あ、危ないじゃないですか！」

そして、神父の安寧は破られる為にあるのだ。

今度は、心底深い深い溜息を吐くと、懷から三本の投げナイフを取り出す。

「——静かにせんか馬鹿者が！」

張り上げられた声と共に、ナイフは神父の手元を離れる。

「ば、馬鹿って！ 馬鹿って言った方が馬鹿なん——ってあああああ
ああ」

シスターは最後まで意見を発する事は出来ず、その日最大の……

否、人生で最も大きな叫び声を上げた。

その叫び声は地下に虚しく響いた。——余談だが、その叫び声は後世まで語り継がれ、教会に近づいた愚かな悪魔の断末魔であるといわれているという。

「どうしようかしら」

横にいるティアの腕を抱きしめて考える。

相も変わらず視線の主は私達を飽きもせず監視している。——

確かにティアを見ていて飽きることなどないのだが。

こう人が多くては探そうにも探し出せない。

更に性質が悪い事に、この視線は複数のものだ。

ばらばらの方向から視線がやってきている。

せめて見るだけではなく、何らかのアクションを起こしてくれれば、まだ対処のしようがあるというのに、ただただ見ているだけ。

溜息一つ。

いつその事、この周辺を魔術で丸々消し飛ばそうかとも考えたけれど、それは後でティアに怒られるし、更にティアに邪魔されるだろう。

「面倒くさ」

視線の主たちをどうにかしようとも思ったが、事はそう簡単に進みもしない。

向こうもプロの様だ。態々不必要な行動をとる事もない。

「ね、アーシャ」

「どうしたの？ お姉——っ」

横を見上げると同時に、引っ張られる感覚と、一瞬の浮遊感。浮遊感が終わると私の身体はティアに抱きかかえられていた。

すっぽりとティアの腕の中に収まる私。——これは所謂お姫様抱っこと言う奴ではなかるうか。

周りがじろじろと見ている。

監視者以外の視線が集まってくる。

これでは公開処刑もいい所だ。恥かしい。

顔が熱くなる。ああ、きっと自分は耳まで真っ赤になっている事だろう。自分を落ちつける為に深呼吸をする。

——ああ、しかしいい匂い。

甘い匂いの中に微かに香る柑橘系の涼やかな香り。馬鹿だなあ私は。深呼吸なんかしたらもっと落ち着かないに決まっているのに。

——ああ、しかし柔らかい。

私の腕に当たる、服の上からでもわかる柔らかな二つのふくらみ。これは幸せだ。もう死んでもいいかもしれない。なんかもう、公開処刑でもいいかもしれない。どうでも良くなってきた。

「姉妹ごっこはお仕舞にしようか」

耳の近くで囁かれる。

息が首筋と耳に触れ、思わず情けない声が漏れ出た。

「今からは騎士とお姫様ごっこをしよう」

そう言つて、外套の隙間からニツコリと笑みを浮かべてみせ、彼女は人ごみの中から路地へと走り出した。

走る。

——ソレは馬車馬のように。

走る。

——ソレは安馬車よりも乗り心地は悪く。

走る。

——ソレは地上を走るよりも、家々の屋根を飛び渡った。

「——騎士と言うよりこそ泥ね」

乗り心地が安定しない馬車役に向かって苦言を漏らす。本人は馬車やこそ泥と言うより、騎士役のつもりらしいが。

「そうなの？」

「私が知る限り、騎士は飛んだり跳ねたりしないわね」

軽口を叩きながらも、私の頭はガクンガクンと揺れる。

そんな揺れの中で喋っていても舌を噛まない私を褒めて貰いたいぐらいだ。

「じゃあ、私はアーシャの心を奪う泥棒だね」

大きな踏み切りと共に、彼女は恥ずかしげもなくそんな言葉を口にした。——きっと、後で思い返して慌てふためくのだろう。

身体を襲う浮遊感。屋根と屋根の十メートルほどの距離を彼女は軽々と飛び越える。

襲い来る浮遊感が何とも心地よい。

「十年近く手元に置いとくなんて、随分物持ちの良い泥——っ！」

ダンッ！——と、勢い良くティアが着地した衝撃で思わず舌を噛む。

——痛い。喋られない位痛い。

「うーっ！」

余りの痛みに、抗議の視線をティアに送る。

そんな私を見て彼女は乾いた笑みを浮かべた後、そっと大切な宝

物を置くかのように、静かに降ろす。

とても大事な降ろしかた。その気遣いをもう少し移動に割り振れないのだろうか。

変な所で彼女は紳士なのだ。

「……ふう。一つ言っておくわ、下僕。積み荷、もしくは淑女^{レディ}は丁寧に扱うものよ」

噛んだ舌の痛みが引いた所で彼女に告げる。

「あははー。ごめんごめん」

私の苦言も何とやら。

のりりくらしとした態度で彼女は私の視線から逃げると、周りを見渡す。

中心街から適度に離れた住宅街の屋根。

それが私たちの今いる所。

もしこれが昼間ならば、色取り取りの屋根を眺める事が出来るのだろうが、生憎とこの暗がりではそう観賞する事も出来ない。

だが、しかし――

「綺麗だね」

「……ええ、そうね」

中心部から枝木を伸ばす様に張り巡らされた光の道は、この期間にしか見られない景色と言える。

それは、隣で呆気に取りられ口を開けている彼女が言う様に、本当に、綺麗なものだっただ。

「でも、景色を堪能は出来ないみたいね」

一つ溜息。

横では外套から顔を出したティアが耳をピクピクと動かしていた。

「――何人？」

「……六人ほど、かな？」

自信なさげに、キョロキョロと何度も彼女は辺りを見渡す。その金色に輝く瞳は、薄暗い闇の中で、月の様に冷たい輝きではなく、太陽の様に暖かな光を秘めていた。

彼女の答えを受け、私も周りを見渡す。

音は聞こえないが、こちらに向かつて走る気配があるのは確かだ。私たちを追うのに魔術を使っている。――ならばティアには、はつきりと感じ取ることができるだろう。

魔力の感じ方は人々だと聞いた事がある。

――私ならば、まるで水の流れの様に魔力を感じる事が出来る。

でも、私は……と言うより、ティア以外の人間には、自分の魔力以外を感じ取るのは難しい。精々、魔力が集まっているな。や、魔術を使っているな。という程度である。

また、遠ければ遠いほど魔力は察知するのが難しくなる。

「――この感じ」

だが、ティアは違う。

金色に輝く瞳は、全てを見通すかのようにとある地点を眺めつづけている。

「……やっぱり六人だね。探知魔術を行使しているのが三人」

黄金瞳。またの名を妖精瞳。

それは神々と交信を行う為の瞳だと言われ、その瞳を持つ者を昔は神子とする地域もあった。

その瞳は、あらゆる神を見、精霊を見、妖精と戯れ、あらゆる事象を見通すと言い伝えられている。――勿論、そんな事は出来ない。ティアにできるのはただ一つ。

――魔力を感知し、その魔力の流れを識ことだけだ。

「うーん……これは知られちゃってるな」

横でティアが苦そうに言葉を洩らす。

月光を受けながらキラキラと輝く髪と相まって、その哀愁を漂わせるかのような表情は何とも言い難い色香がある。

「そう。一手遅かったわね」

とは言ってみせるが全く持って心配はしていない。あの距離から私程度に魔力の漏れを感知される程度の実力なのだ。処理に時間はさほど感じない。

「まあ、逃げちゃったしこうなるのは目に見えていたんだけどね」

「ここに来るのも時間の問題ね」

「――」

「ティア、どうかし――」

返事がない事を不審に思い、隣へと目を向ける。

キヨロキヨロとティアは忙しなく周りに視線を配る。勿論その先にあるのは闇だ。

私には何も感じられないが、彼女には何か感じられるのだろうか。

「ティア、どうかしたの？」

「――うーん……なんでもないかな」

再度彼女に問いかける。

納得がいかないのか、しきりに彼女は何度も首を傾げてみせる。

「そう。それならいいのよ」

ティアの様子に納得はいかないが、それでも目の前の事に頭を切り替える。

何度も何度も投げられた不躰な視線。その視線の主たちに仕返しをするのだ。――最も、なにもせずそのまま逃がしたら、明日の私たちは磔刑だ。

まあ、逃がしたとしても、そんな事態に陥る事なんて万に一つもないのだけれど。

それでも、不快にされたのに、ただ黙っておくことが私にはできない。

「散々視姦されたわ。淑女に不躰な視線を送るだなんて、それ相應の罰を受けないといけないって、世の理で決まってはそう決まっているわ」

ぐいと彼女の首に手を回し、顔を近づける。彼女の吸い込まれそうな瞳に、私の影が映っている。

「エスコートしてくださる？」

「喜んで」

私の軽口に合わせて、彼女は私を抱き抱えた。

軽く踏み切った音の後、襲い来る浮遊感。

少しだけ空に近づいた気がした。

月の光に照らされ、ティアの髪の毛がキラキラと輝き宙を舞う。

ソレは幻想的な風景であり、いつまでも見ていたいと私に思わせる。だけれど、それは叶わない。

「アーシャ、準備は良い？」

何度目かの力強い踏切の後、ティアが告げる。それに一つだけ頷いて見せ、私は魔術を行使する。——使うのはただ身体を強化するだけの魔術。

今日はこの魔術ともう一つだけで遊んでみよう。

「無茶はしないでね」

「貴女も、よ。折角綺麗な肌なんだから」

再度ティアに心配され、私は思わず苦笑を浮かべる。——ティアにはそう言ったが、勿論彼女の手を煩わせるような事はしない。

彼女は私の下僕で、私は彼女の主人なのだから。

下僕を守るのは主人の務めだ。

浮遊感が終わり、落下する。

グングンと迫る大地。

視線を少しずらすと、人形のように棒立ちになっている聖職者たちがいた。——ふうん。こいつらが視線の主たちが。

着地の瞬間に、口をしっかりと閉じる。

私は、二度も同じ過ちをしない主義なのだ。

「なっ……」

急に表れた私たちを見て、呆気に取られたのか、神父たちは情けない声を上げた。

一般的な神父の姿とは違い、肩に懺悔を象徴する十字架と、神罰を象徴する、聖女の最期を看取ったとの由来がある花をあしらった紋章。それは——

「あら？ ただの獵犬^{ハンター}じゃない」

——教会の私兵を示す紋章。

教会の権威を守るために構成された、神秘を保護するための組織。それは教会の既得権益を守るためだけに創設された、^{イヌ}猟犬の集まり。

「今晚は淫売さんがた」

茫然とした神父たちを尻目に、恭しく、そして大仰にお辞儀をする。

絶対的な強者の様に。

物語で語られる様な尊大で邪知暴虐な王の様に。

「今日も忙しく祈り（あえぎ声）を上げたのかしら」

からかいの声を上げながら、一步一步と神父の集団へと近づく。右手で虚空を掴みながら。

魔力の流れを整える。

——展開する。

自身の身体から流れる魔力（川）の支流を一つに纏め上げる。

——展開する。

纏め上げた魔力に、一つの容を^{イメージ}用意する。

——展開する。

「——Ad」

慣れた一連の動作でソレを喚ぶ。

刹那の瞬間も終わらぬ時間で、それは私の手中に収まった。

確かに感じる金属特有の重み。

^{オリハルコン}不変の金属を外殻に、^{ミスリル}魔力伝導体を芯に使った大剣。

大小八つの刃が重なり合った大剣は、聊か私の体型に不釣り合いだろう。

「私、隠れ鬼は余り好きじゃないの」

申し訳程度の重みを感じながら、私は大剣を両手で握りしめ、構える。

「——っ！」

殺気に向けただけで、神父の一人は声にならない悲鳴を上げる。

——嗚呼、嬉しい。

先程まで私を苛々させて、ティアとのデートを邪魔したのだ。これ位、当然の報いだ。

徹底的に、苛めて、虐めて、イジメ貫いてあげる。

「さあ、神父さん？」

反撃を許そう。

幾らでも油断してあげる。慢心してあげる。

有象無象を踏み潰し蹴散らし、虫けら共が油断と言ったたった一つの希望に縋りつくのを嘲笑って蹴散らしてやろう。

「鬼ごっこし（あそび）ましょう？」

自分の顔が醜悪に歪むのがはつきりとわかる。

どれだけ時間がたとうが嫌いなモノは嫌いなのだ。

ティアを後ろに待機させて置き、私は一足飛びで神父の集団の中に割って入る。

「つつかまーえた」

一人に目標を定め、剣を振るう。

まるであつさりとバターを切るかのように、刃は人体を切り裂いた。

「そんなもの？ どうしたの淫売ども。ご自慢の奇蹟とやらは使わないの」

ペろりと自分の頬に付いた血を舐め取る。その血特有の生臭さに身体を歓喜に振るわせる。

仲間の一人が犠牲になってようやく神父たちは我に返った様だ。

——全く、悠長な奴らだ。

ティアには近づけさせない様に牽制しながら、神父たちの動きを観察する。

猟犬特有の大型のナイフを持った神父たちは前衛に二人。そして残りの三人は後ろで待機する。

どうやら二人で私を抑え、残りの三人で魔術を行使しようというつもりだろう。そう上手くいかないものだとも思うが、ここはいつその事乗ってやるのも興味深い。

聞きたい事もあるし、少しばかり力を抑えなければなるまい。

「神を騙る化け物如きが——！」

雄叫びをあげ、神父の二人がナイフを抱えて、飛び込んでくる。大きな得物を持つ私に対して、自分たちの持つ小回りのきくナイフの方が有利と判断したのだろう。

その判断は正しい。——勿論、相手が私でなければ、だが。

片方の首を刎ねるのは簡単だ。だが、その間に私はもう片方のナイフに刺されるだろう。両方とも一緒くたに弾き飛ばすのは簡単だが、それでは遊びにならない。

だから――

「――ふっ！」

――剣をもう一本増やす事にした。

金属音を掻き鳴らして、四つの刃は啼き声を上げる。

力を少しだけ入れて、密着する神父たちを蹴散らす。なにが起こったかわからない神父たちを尻目に、パズルで遊ぶように二本の剣を一本に戻す。

鏡を眼前に置いてあげたくなるぐらい愉快的表情を、神父たちは浮かべる。

愉快。愉快。嗚呼、愉快だ。

「神を騙るなんてとんでもない」

左手を剣に添える構えをし、大地を蹴る。

身近な神父に詰めより、剣を振るう。――振るう直前に、大剣からナイフ状の刃を抜き去って。

まずは大剣で神父の手を切り落とす。と、同時に左手に持つナイフで脚を斬る。

斬った対象には目もくれず、上半身を半回転させながらその力を利用して、手に持ったナイフをもう一人に投げる。

「私はそこまで傲慢じゃないわ」

崩れ落ちる男を尻目に言葉を紡ぐ。

前衛が居なくなったというのに、まだ術式は完成していないようだ。――これだけ時間がかかっていては実践ではとてもではないが使えたものではない。

だから、暇なので一人で喋る事にした。

「神を名乗るってことは見知らぬ誰かを救う事。そんなのごめんよ。誰かの為に自分の力を使って、無益な事をして、得られるのは信仰だけ。……無駄な事ばかりね。だったら、自分の為に、自分の所有

物の為だけに力を振るう私は――」

目の前に展開される魔術陣。

神聖帝国語（古代メディア語）で描かれたその陣は青白く輝き、それはそれは綺麗な色を浮かべている。

喋ってる途中じゃない。と一人愚痴を漏らして、肩の力を抜く。

「誰よりも――」

陣に青い光が集まる。

闇に浮かぶそれはまるで雪の様に綺麗だ。

一瞬だけ大きくなった光は、収縮し、私目掛けて一直線に飛んでくる。

「とても――」

魔力を操作し、剣を振るう。

魔力が通った剣は刀身を青白く発光させる。振るった軌跡を青く闇夜に残し、刀身は魔術とぶつかる。――が、あっさりと魔術は霧散する。

霧散するそれは、周りを薄明るく照らす。その淡い光はまるで季節外れの蛍の様だ。

「――人間らしいのよ」

戦々恐々の神父たちにウィンクのサービス一つ。

さて、これから愉しいお話の時間だ。

ゆっくり、ゆっくりと神父たちに近づいていく。威圧するように剣先で地面を擦りながら。

先程の魔術に魔力を全部つぎ込んだのだろう。

彼らは肩で息をしながら膝を付く。

「さて、貴方達に聞きたい事があるの」

自分が浮かべる事が出来る限りの笑顔を浮かべる。

話をするのに必要なのはお互いが安心できるような空気作りだ。

「話す事は――ない」

眼鏡を掛けた神父は私を睨みつける。

神の権威を守るための獵犬とは良く言ったものだ。教会のペット

は良く賤けられている。

どうやら尻尾を振るのは教会にだけの様だ。

私に向かつて振るのは尻尾ではなく、研がれた鋭い牙のみか。だ

つたら——

「薄汚い契約者めっ！ 貴様にはいつか神の——」

「あそ。じゃー貴方はいらない」

だったら——不必要な物は処分してしまおう。

軽く剣を振るい、首を飛ばす。

魔力を限界まで消費した彼は、動く事もままならず、あっさりと首を落とされる。

「さて、貴方達に質問をするわ」

パズルを扱う様に剣を弄ぶ。

それは掌の中で踊り狂い、新たな貌を覗かせる。

二振りの長剣に容を変えたソレを二人の神父に付き付けて、口を開く。

遊びが終わったことを感じ取って、ティアが私の隣に立つ。

「私に用かしら？ それとも下僕に？」

首が飛んだ同僚を見て委縮したのか、ガタガタと神父は震える。

「……っ！——っ！」

声を出そうにも震えが酷過ぎて、言葉を絞りだせないらしい。

その様子はどう見ても練度の低い新兵だ。普通は横の首無しみたいな狂信者ばかりだというのに。

——この程度の奴を送り込むなど、教会もとうとうやきが回ったらしい。

「もう一度質問よ？」

一度だけ剣を振るい、前髪を飛ばす。

痛みが想像しやすい獲物と言うのは、尋問の時には非常に使いやすい。

魔術を使えば、尋問の方法など幾らでも浮かぶのだが、この程度で魔力を消費するのもまた馬鹿らしい。

だから、わかりやすく刃物で恐怖心を与える事にする。

「どちらに、用事があったのかしら？」

この質問の答えはもうわかってる。

まずはこうしてわかりきった質問をすることで、嘘を言っているかいないかを確認するのだ。勿論、わかりきった質問は一度では終わらせない。

十中八九、標的はティアだろう。

「獣の檻」に」

——ほおら。

「街中で視姦していたのは貴方達かしら？」

「——監視していたのならば、それは私達だ」

「あら。紳士なら淑女を不躰に眺めないものよ。教会では喘ぎ声ばかり上げて、最小限の礼儀すら教えないのかしら」

思わず笑みが零れる。

従順に、従順に質問に答える彼らは正に犬そのものだ。

「——きさっ！」

「はい。罰ゲーム」

嘲りに激昂した一人の腕を剣で突き刺す。その時に視線を横に向けるのも忘れない。

こうやって、視線を向けることで相手に次はお前だと警告する事が出来る。

案外、殴る蹴るを行うより簡単に人を素直にさせる方法だ。

「貴方達の作法が成っていないのは本当の事よ。目上の者にあつたなら、地面に額を擦り付けながら崇めなさい。それが出来ないのなら死ぬ」

小粋なジョークを交えながら、もう一度質問を投げかける。ここからが大事なのだ。

「なぜ、“獣の檻”を狙ったの？」

もう何年も“獣の檻”としての彼女を放置しておいて、狙ってくるとは思わなかった。

ティアの魔術師としての才能に気が付き、魔女裁判にかけようとしたのならまだ話がわかる。——ここ最近、魔女狩りが活発に行われているのだから。

しかし、彼らは魔術師としてのティアではなく、“獣の檻”としての彼女に用があるとは。

「し、知らない」

震えを一段階強くし、涙目になりながら神父は口を開く。

横の神父に突き刺した剣を軽く捻りながら、涙目の神父の眼前に剣先を突き付ける。

一段階高くなったうめき声を聞き、神父は顔を白く染め上げながら首をただ振るだけだ。——どうやら本当に何も知らされていないらしい。まあ、下っ端の事と考えれば、それは当たり前と言えば当たり前前の事だが。

「そう、それはとても残念だわ」

軽く剣を振るう予備動作に入る。少しだけ、虐めるかのように勿体ぶって。

加虐的な愉悦に身を震わせる。

じつくりと時間を掛けて、剣を振ろうとしたその時、空気が震える。

「アーシャッ！」

ティアの叫び声。

その声が発せられる前に、私はティアの傍に移動する。

「魔術!？」

あらゆる所に視線を向けるティアに聞く。

「——魔力? 違う……なに？」

少し混乱したかのようにティアが呟く。

ティアと背中を合わせ、様々な所に視線を這わせる。

路傍の片隅には神父の死体。

生き残った神父たちも何か異変を感じて、身を震わせる。

「——いたっ！」

路地裏でナニかが這いずつたのを視界に収めた。

それを皮切りに、ぶよぶよとした定型とも不定型とも思えない生物が姿を現す。

漂う異臭。

腐った水となにか生ものが腐った様な臭い。

それは目の前の人の容を最低限留めた人型のナニかから発せられるものか。

「神性？ こいつら、神性だよ」

黄金瞳で観察し、彼女は告げる。

神性と言われた、その名称に相応しくない身の毛もよだつ異臭を放つナニかは、路地から、側溝から、雨樋から、あらゆる場所から這い出て来る。――辺り一面を覆うかの如く。

吐き気を堪えるのも我慢に近づきそうな時、ある一角でそれは起こった。

神父の死体に群がったそれらは、死体に舌を這わせるように口を近づけると、血を吸い取っていく。

『お母さん』

と呼びながら、まるで乳飲み子の様に。

血の滴る音と、粘着質な舌を這わせる音が通りに響き、血の匂いと、水と生ものが腐った臭いが辺り一面に立ち込める。

「ティア」

「な、なに？ アーシャ！」

街中ではとてもじゃないが奥の手は使えない。

ちまちまと叩き潰していても良いが、そうするとこの筆舌に尽くしがたい臭いが自分に移ってしまいそうだ。――私から香る自分以外の匂いはティアだけで十分だ。

「逃げるわよ」

ティアの手を引き、走り出す。

2 - 5 (後書き)

早く前置きを終わらせたいです。

映画を見ていて更新遅れました。本当に申し訳ありません。
やっぱりツイてない男は面白いですね。

あと、七人のマツハも面白かったですよ！

関係ないですね。申し訳ありません。

次回は早めに更新できるように頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7981y/>

性悪と子羊と

2011年12月27日01時51分発行